

今年度の野田中学校には、英語の初任者がいる。入学式、始業式からちょうど1カ月となった。大型連休も終わり、また新たな気持ちでスタートするこの時期に、彼の状況について振り返ってみたい。

まず、彼には、この後も何度になるかわからないが、この紙面に登場してもらおう目途が立ったので、改めてSS先生とさせていただく。なぜS先生ではないのか。この紙面では、すでにS先生には登場していただいているからである。

さて、「授業のことが心配です」と言って英語の授業をスタートさせたSS先生だった。最初は、生徒に遠慮をしていたと思う。無理もない。相手は3年生である。授業にはテンポというものがない。だから、生徒も乗ってこない。「テンポがあるといい」とアドバイスした。かといって決して簡単にできることではない。

授業にはテンポとリズムが必要である。特に英語ではテンポが大切である。テンポとは、一定の速さのことである。リズムとは、様々な長さや休止の組み合わせである。授業は、一定の速さのテンポで進んでいくが、意図的にリズムを変えることがある。テンポだけでは授業は苦しい。リズムも必要なのである。

SS先生の授業には、そもそもテンポがなかった。しかしである。彼は、毎時間テンポを意識してきたそうである。私の記録によると、4月22日（木）5校時の授業となっている。廊下を歩いていると、若い男性教員の声が聞こえてきた。英語の授業だった。まさか、SS先生だとは思わなかった。まるで別人である。軽快な調子で英語を話し、生徒に指示を出している。テンポがいいのである。生徒もすぐに反応している。ノリがいい。

テンポを意識して授業をやってきたとはいえ、こんな短期間でここまで変わるものなのか。おそれいった。そして、考えた。SS先生には、まだ自分の授業のスタイルというものがないのである。それもあって、変わりやすかったのかもしれない。一度スタイルができてしまうと、そう簡単には変わるものではない。最初は、うちの学校に、SS先生の他に英語の若い男性教員がいたっけと思ったくらいである。

こんなこともあった。4月18日（日）だったが、SS先生は、初めて部活動の大会で引率および監督を務めた。試合では、予選リーグを勝ち上がり、決勝トーナメントの3回戦まで勝ち上がった。次の試合で勝てばベスト8という試合では、どちらが勝ってもおかしくない接戦となり、野田中が負けてしまった。

だが、収穫が大きかった。最後の試合で負けてしまった3年生ペア2名が涙ぐんでいたのである。そしてSS先生である。選手と保護者を前にし、顧問の先生として話をしている途中で涙ぐんでいた。この姿を見て私は「ああ、この先生は大丈夫だな」と思った。教員にとって一番大切なハートを持っていることがわかった。

負けてしまった3年生に私は言った。「いいか、今日負けて自分が泣いたことと、顧問の先生と一緒に泣いてくれたことは忘れるんじゃないぞ」と言いながら、自分も涙ぐんでいた。

この1カ月はSS先生にとって激動の日々だったことだろう。もしかしたら、大いなる成長を遂げた期間だったのかもしれない。若者の可能性は無限大である。そのことをSS先生から教わった。また、ひと月後、どうなっているか楽しみである。理想としては、ちょっとした壁に当たっていることを期待したい。そもそも、成長しなければ、壁には当たらない。